

スリランカの都市部における親と子どもの時間の過ごし方 ウィンダヤー・ウェーラトゥンガ（スリランカ）

スリランカの就労率は54%で、経済活動を行う人口比率の内訳は、男性が65%で女性が35%となっています（2013年、労働力調査、スリランカ）。経済状況やライフスタイルの変化に伴い、現在、スリランカの都市部では、共働きの家庭がほとんどです。今回のレポートでは、スリランカの都市部の家庭に焦点をあてたいと思います。

スリランカでは、若い夫婦に子どもが生まれると、その生まれた子どもの世話を祖父母がするのが一般的です。というのも、デイケア施設といった子育て支援の制度がまだ普及していないからです。労働日数は最低でも週5日で、勤務時間は朝の8時から夕方5時までというのが、よくあるパターンです。スリランカでは渋滞が頻発するので、朝早くに出勤し、夕方遅くにやっと帰宅できるという状況です。ですから、子どもと過ごせる時間はかなり制限されるのです。

親が子どもに大量のおもちゃを買い与え、子どもの言うことを何でも聞いてしまう—スリランカでは、こんなケースがほとんどです。こうしたことは、「罪悪感からくるプレゼント」と言うことができるかもしれません。子どもと充実した時間を過ごせないことを、このプレゼントで穴埋めしようとしているのです。子どもは祖父母やベビーシッターとともに家での時間を過ごし、そしてその祖父母やベビーシッターの習慣、雰囲気、さらには言語に慣れ親しみながら育ちます。ここで、私の友達の話を紹介しましょう。彼女はシンハラ族ですが、タミル人のベビーシッターを雇っています。彼女によると、彼女の3歳になる息子はタミル語を流暢に話すものの、母国語であるはずのシンハラ語は話せないとのこと。というのも、ベビーシッターがその息子に話しかけるときに使う言葉がタミル語だからです。



祖母と孫

現在の状況では、親が子どもたちと健全な関係を築くには、コミュニケーションを図るための特別な努力が必要です。国内どころか、海外にまで出張に行かなければならない親もいますが、これでは、親と子どもの関係にさらなる重荷が加えられることとなります。幼い子どものそばに親がいないことがもたらすマイナスの影響を、大半の親はきちんと理解していません。思春期になると、子どもは親の言うことを聞かなくなり、その時になって初めて、子どもに対する影響力を失ってしまったことを親は認識するのです。

日中は子どもと話す時間がとれず、子どもとのコミュニケーション手段は、ほとんどの場

合、電話に限定されます。私の同僚のケースでも、仕事で忙しいときに子どもから電話がかかってくると、特に何も気にせず、手短かに会話を切り上げて、すぐに電話を切る、というシーンをよく見かけます。重要なのは、親が子どもに、少なくとも、折り返し電話をかけてあげることなのですが、そんなことをする親はほとんどいません。というのも、どんな問題が起こったにせよ、夜、家に帰れば、わかることだと思っているからです。親が自宅に仕事を持ち帰り、家で仕事をしようとしている時に、子どもに「邪魔される」となると、状況はさらに悪化します。

しかしながら、保護者面談、運動会、演劇会、発表会など、子どもの学校の行事があるときは、行事に参加するために、親は懸命に時間を作ろうとします。時には、父親と母親が交代でこうした行事に参加することもあります。常に、もがきながら、仕事と親の務めの両立を目指しているのです。

さらに、親は、平日にできなかったことを週末に片付けようとしています。全ての家事をこなしながらも、その一方で、子どもと向き合います。また、親は子どものさまざまな活動を支援します。音楽、スイミング、バドミントンといった活動があるのですが、これらが行われるのも、また、週末であることが多いのです。日曜日の晩、もはや親にエネルギーなど残っていません。月曜日になると、疲労感を背負って出社するのです。「オフィスに勤務する平日の丸々一週間よりも週末のほうが忙しい」といった声は、親から、中でも母親から、よく聞かれます。

子どもを育て、健全な関係を築くことは、常に、難しいことです。重要なのは、子どもとコミュニケーションを図り、理解と思いやりのある深い関係を結ぶことの重要性を、親がしっかりと認識することです。子どもと充実した時間を過ごすために、親が毎日のスケジュールの中に意識的に余裕をもたせるべきではないでしょうか。こうすることで、親と子どもの間に健全でハッピーな関係が構築され、引いては、社会全体にプラスの波及効果をもたらされるのではないのでしょうか。